

# 16世紀末の東アジアにおける国際関係とイエズス会

## ——「文禄・慶長の役」における日本軍の従軍司祭を中心に——

金 泰 虎

はじめに

1. イエズス会の東アジア布教構想
  - (1) イエズス会の日本進出
  - (2) イエズス会の朝鮮への布教計画
2. 豊臣秀吉軍の朝鮮侵略
  - (1) イエズス会の布教の変化
  - (2) 朝鮮の戦場の状況
  - (3) イエズス会宣教師の従軍要請

3. グレゴリオ・デ・セスペデス (Gregorio de Cespedes) の戦場での活動
    - (1) セスペデスの宣教活動
    - (2) セスペデスの帰還
- おわりに

はじめに

文禄・慶長の役（韓国では壬辰・丁酉倭乱、中国では万曆朝鮮役と言う）<sup>1)</sup>は、多様な観点から幅広く日韓両国において研究が進められてきた<sup>2)</sup>。ところが、当時日本軍にカトリック (Catholic) 司祭が従軍したという事実はあまり知られておらず、研究も活発に進められてきたとは言えない。朝鮮侵略に参戦したキリシタン大名に呼ばれて従軍した司祭は、日本に進出していたイエズス (Jesus) 会 (耶蘇会) 所属のグレゴリオ・デ・セスペデス (Gregorio de Cespedes) である。

この従軍司祭をめぐるのは、山口正之氏の先駆的な一連の研究がある<sup>3)</sup>。氏は新しく発見されたセスペデスの書簡の英訳本<sup>4)</sup>を参考にしつつ、またイエズス会宣教師の編纂史料をもとにして研究を進めた。そこでセスペデスに関する生涯を追った上で、彼は日本軍が朝鮮に出兵して戦塵にまみれ、気候・風土の激変に健康を害し、逃亡や帰還が続出する中で軍隊に対する慰問使として渡り、朝鮮に布教する意図はなかったとし、滞在期間は一年半だったとする<sup>5)</sup>。

- 1) 戦争の呼称については、北島万次『朝鮮日々記・高麗日記』（そしえて、1982年）16頁を参考されたい。
- 2) 例えば、藤木久志は『豊臣平和令と戦国社会』（東京大学出版会、1987年）で豊臣秀吉の朝鮮侵略を惣無事令の一環として把握しており、貫井正之は『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵の研究』（青木書店、1996年）で朝鮮義兵の活動と彼らの社会階層との関連性について、また当時朝鮮半島の南海岸に築いた倭城に対しては『倭城の研究』（城郭談話会）の中で大勢の方々が論じている。
- 3) 山口正之「日本耶蘇会宣教師セスペデスの渡鮮」（『青丘学叢』2号、1930年）＝第1論文、「耶蘇会宣教師の入鮮計画」（『青丘学叢』3号、1931年）＝第2論文、「耶蘇会宣教師の朝鮮俘虜救済及教化」（『青丘学叢』4号、1931年）＝第3論文、「文禄役中朝鮮陣より発せし耶蘇会士セスペデスの書翰につきて」（『史学雑誌』49-2号、1938年）＝第4論文。そして第1・4論文に補正を加えたのが、「文禄役中朝鮮陣から発した耶蘇会士セスペデスの書翰の研究」（『国学論叢—庸斎白染滄博士還甲記念—』思想界社、1955年、韓国）＝第5論文（便宜上、発表年度に従って順番を加えた）。
- 4) 燕京大学のレーン教授が英訳したセスペデスの書簡を、再び山口氏が日本語訳して使う。
- 5) 山口氏の第5論文、第2・3・4論文と「朝鮮役における被虜人の行方」（『青丘学叢』8号、1932年）を合わせて書き下ろした「16世紀朝鮮キリシタンの黎明」（同氏著『朝鮮キリスト教の文化史的研究—朝鮮西教史—』御茶の水書房、1985年）。初出は『朝鮮西教史』（雄山閣、1967年）であったが、改題して再刊されている。

その後、韓国の金良善氏がこの問題に関心を寄せて研究を行い、キリシタン大名が脱走・自暴自棄の兵士のために司祭を招待したとし<sup>6)</sup>、山口氏とはほぼ同じ観点からセスペデスの従軍を把握している。ただ、氏はセスペデスの渡航は二回にわたっており、その滞在期間は一年八ヶ月だったとし、渡航した回数や滞在期間をめぐる若干の意見の対立は見られる。

最近、韓国の朴哲氏は翻訳本に頼ってきた従来の研究者とは違って、文禄・慶長の役とセスペデスに関わる原史料に直接触れて研究を行い、その成果を単行本としてまとめている<sup>7)</sup>。そこでセスペデスに関する史料を発掘して彼の生涯をより詳しく調べつつ、彼の従軍意図も分析している。ここで氏はセスペデスが宣教師としての本来の任務や職務を遂行するために朝鮮に渡ったとし、宣教活動が主たる意図であったとしている。

ところで従来の研究で問題なのは、山口・金両氏の観点であれば、平和の象徴とも言える司祭が戦場に足を運んだことで兵士を慰安して励まし、戦争を助長したとするような見方につながる。すなわち、セスペデスを戦場に呼び寄せたキリシタン大名の観点のみから司祭の従軍を把握していると言えよう。一方、朴氏は山口・金両氏とは異なる観点からのセスペデスの朝鮮への渡航説を打ち出している<sup>8)</sup>。立証が十分ではなく理解しにくい点も多いが、両氏とは異なる司祭の従軍の意味をイエズス会の立場から解き明かそうとしたことは評価できよう。しかし、「宣教師追放令」が出されて迫害の危険性のある厳しい状況のもとで、キリシタン大名が戦場まで司祭を呼びつけて布教活動をするようにしたはずがない。このように対立した二つの見解が出されたのは、セスペデスの従軍そのもののみに焦点を合わせた結果であろう。

本稿では、このような問題点を踏まえ、イエズス会の東アジア布教という広い観点から従軍司祭の問題を見直したい。このために日本布教に情熱を燃やしたイエズス会の東アジア布教方針を追いつつ、この観点に立って文禄・慶長の役におけるセスペデスの従軍の意味を再検討する。

## 1. イエズス会の東アジア布教構想

本章では、イエズス会がキリスト教の布教のために東アジア（Asia）に進出してきて日本に上陸して布教しつつ、朝鮮の布教に熱意を示した背景について探る。

### (1) イエズス会の日本進出

まず、イエズス会やこの会の東アジアへの進出について理解を助けるために若干概説的な説明から始めたい。

6) 金良善「壬辰倭乱 従軍神父 세스페데스의 来韓活動과 그 影響（壬辰倭乱における従軍神父セスペデスの来韓活動とその影響）」（『史学研究』18号、韓国史学会、1964年、韓国）。

7) 朴哲『세스페데스－한국 방문 최초 서구인－（セスペデス－韓国を訪問した最初の西欧人－）』（西江大学校出版部、1993年、初出は1987年、韓国）。

8) 前掲朴『세스페데스（セスペデス）』44頁で氏は、「セスペデスは従軍神父ではない」と記述しつつ、「福音伝播のために朝鮮に渡った」としている。ところが、実際セスペデスは日本軍に従軍していたのではない。福音伝播（宣教活動）が目的であったならその対象は誰であったのか、明確ではない。敢えて推測するば、セスペデスが慰問使だったという山口氏とは違う見解を打ち出そうとする狙いがある、布教活動のために朝鮮に渡航したとする主張だと思われる。氏の主張が成り立つためには、従軍した司祭の役割と行動を綿密に分析する必要がある。このような問題点は本論の中で議論する予定だが、何よりも氏はスペイン語が専門であるので原文が解読できる強みがある。今後の研究に期待したい。

15世紀の中世のヨーロッパ (Europe) において東洋布教に意欲を見せて、実践に乗り出したのはイエズス会であった。このイエズス会は、1534年パリ (Paris) でイグナティウス・デ・ロヨラ (Ignatius de Loyola) が創設し<sup>9)</sup>、1540年教皇パウロ (Paulo) 三世に認可された聖職者の修道会である。このイエズス会は会員自身の霊的成長から完徳に到達することや、すべての人の救いの促進という二つの目的で創立された<sup>10)</sup>。

ところで、イエズス会は非キリスト教徒への布教活動を初めから重視した<sup>11)</sup>。その一環として東洋に目を向けて、イエズス会の創立メンバーであるフランシス・ザビエル (Francis Xavier) が1541年インド (India) のゴア (Goa) を訪れた。ゴアはインドの南西部のアラビア (Arabia) 海に面している都市である。15世紀の終わり頃ポルトガル (Portugal) 人が南インドに上陸して、16世紀の初頭にゴアを支配し、同世紀の中頃にはイエズス会がゴアに進出して布教の拠点にした。16世紀中頃からは管区大司教区が置かれて東洋全体の布教に大きな役割が果せるようになったのである。

このゴアを拠点にしてイエズス会のザビエルは、まずインドの布教に本格的に乗り出したが、計画通りには進まなかった。1547年彼は東南アジアのマラヤ (Malaya) 半島の西海岸に位置するマラッカ (Malacca) まで進出して、東アジア布教のために日本と中国に関する情報の収集に励んだ<sup>12)</sup>。

そこで日本人ヤジロウに出会い<sup>13)</sup>、日本人のキリスト教への改宗の可能性などを聞いて日本での布教を実現しようとした。ヤジロウとザビエルが出会ったことで東アジアの中で最初に日本へイエズス会の宣教師が上陸することになった。ザビエルは日本での布教に備えてヤジロウにキリストの要理を教えるなど綿密な準備を行った。一方、ポルトガルの商人から将来日本の布教に向けて様々な情報をも得て、日本への渡航を決意した<sup>14)</sup>。

いよいよ、天文18 (1549) 年7月22日ザビエルはイエズス会の宣教師として初めて鹿児島に上陸して日本の地に足を踏み入れた。これによってイエズス会の日本での本格的布教活動がスタートしたのである。ザビエルはキリシタン<sup>15)</sup>の信者の獲得に力を注いで上層 (貴族) 階級の改宗をすることを通じて下層民を改宗していく布教方針を取り入れた。そこで天文20 (1551) 年1月京都に上って布教活動の可能性を模索したが、すでに天皇には権威がなく宣教の頼りにならないと判断して上層階級からの改宗を断念した<sup>16)</sup>。そして戦国社会の実情に鑑み、有力戦国大名と領主を対象に布教して保護をえる方

9) 垣花秀武著『イグナティウス・デ・ロヨラ』(講談社、1984年)。

10) フィリップ・レクリビアン著・垂水洋子訳『イエズス会』(創元社、1996年)

11) 前掲金「壬辰倭乱 従軍神父 세스페데스의 來韓活動과 그 影響 (壬辰倭乱における従軍神父セスベデスの来韓活動とその影響)」706頁で、宗教改革によって西欧で多数の教区を失ったカトリックが東方に新教会を開拓する計画を立てたとする。

12) 岸野久「フランシスコ・ザビエルのチナ情報と布教思想」(『ザビエルと日本』吉川弘文館、1998年)。

13) 海老沢有道「ヤジロウ考」(『増訂切支丹史の研究』新人物往来社、1971年)。『フロイス日本史』の著者であるルイス・フロイス (Luis Frois) はヤジロウをアンジェローとも言う。薩摩生まれで、殺人を犯してポルトガル商船に乗り込んでマラッカに逃げたが、そこでザビエルに巡り会ってザビエルの日本布教を決意させた。ザビエルは彼をゴアの聖パウロ学院で学ばせて、なお洗礼を受けさせ、日本の布教に乗り出した際彼を案内役として勤めさせて一緒に上陸した。

14) 前掲岸野 (『ザビエルと日本』)。

15) 当て字として切支丹・吉利支丹・幾利紫旦・貴理志端・鬼利至端・貴理死貪とも表記する。

16) 五野井隆史『日本キリスト教史』(吉川弘文館、1990年) 41～42頁。

法に転換したのである。

このようなザビエルの戦国社会の実情に適応した布教の方法は、ザビエルが日本を去った後も彼の後継者であったコスメ・デ・トルレス (Cosme de Torres) によって継承された。また、その後日本に上陸したイエズス会の宣教師たちはこの方針に従って布教活動を行い<sup>17)</sup>、現地への適応主義を実践し、日本人の生活に順応する努力をする一方、戦国大名や領主の改宗をしながら保護をえる姿勢をとった。

一方で、九州地域の戦国大名や領主の側も武器・弾薬を手に入れ、またポルトガルの商船を入港させて入港税を徴収するために自領内の港に誘致しようとイエズス会の布教活動を許したのである。つまり、ポルトガル商船の日本来航を布教活動に積極的に利用しようとしたイエズス会の布教方針と戦国大名や領主の思惑が合致したのである。このようなイエズス会の布教活動の経緯からキリシタン大名が誕生して行く。

しかし、イエズス会の布教活動が順調に進められたわけではない。戦乱によって布教活動が停滞したり、既存の宗教勢力である仏僧からの嫌がらせなどもあった。このためにイエズス会の宣教師であるガスパル・ビレラ (Gaspar Vilela) の京都での布教活動はうまく行かなかったが、永禄2 (1559) 年11月には將軍足利義輝に謁見して布教を再開した<sup>18)</sup>。布教に当たって、翌年ビレラが將軍義輝の重臣伊勢守貞孝の協力を得て発給されたのが次の禁制である。

禁制	織利紫旦国僧	波阿伝連
一、甲乙人等乱入狼籍事		
一、寄宿事、付悪口事		
一、相懸非分課役事		
右条々、堅被停止訖、若違犯輩者、速可被処罪科之由、所被仰付也、仍下知如件		
永禄三年		
左衛門尉藤原 対馬守平朝臣 <sup>19)</sup>		

永禄3年のこの禁制の宛名は波阿伝連である<sup>20)</sup>。内容を一見すると、キリスト教の布教に拍車をかけるような保護のように読みとれる。なぜなら、一に人々が司祭に乱暴狼藉を行うこと、二に武将や兵士などが宿舎として利用することと悪口をいうこと、三に根拠のない税や労役を加えることをすべて禁止しているからである。しかし裏を返せば、布教活動における乱暴狼藉や悪口、そして根拠のない課税に苦しむことを示す。実際、天文23 (1554) 年、豊後の府内町で宣教師のバルタサルと僧侶が論争をした。その後、僧侶は「あの外国人の説く教義は虚偽、架空話である」のように悪口をして回ったのであ

17) 前掲五野井『日本キリスト教史』47頁。その具体的な布教方針は次の通りである。一つ目は日本と日本人に対する適応主義の実践、二つ目は封建領主から布教の許可をえて家臣と領民に対する自由な布教を確保すること、三つ目はポルトガル商船の日本来航を布教活動に積極的に利用すること、四つ目は機会をとらえて京都での布教に着手することである。

18) 松田毅一・川崎桃太共訳『フロイス日本史』3巻 (中央公論社、1979年) 76～78頁。

19) 「室町家御内書案」(『中世法制史料集』2、岩波書店、1970年)。

20) Padre (パードレ) を当て字にして表記したのである。意味は司祭、つまり神父であり、伴天連とも記す。

る<sup>21)</sup>。いかにイエズス会の布教が困難さに直面していたかが端的に現れている。このようなことが起こっていなかったならば、わざわざ禁制を出す必要はなかっただろう。

イエズス会はこのような困難に直面しながらも、永禄12(1569)年から織田信長の保護を得つつ粘り強く布教活動に取り組んだ。布教活動に好意を示してきた信長は天正10年突然家臣に殺されたが、彼を継承した豊臣(羽柴)秀吉も当初イエズス会に対する変わらない政策を打ち出したので、引き続き武将や民衆の改宗に取り組むことができた。

以上のように、日本に進出したイエズス会が風土に適応した努力と権力の好意を取り付けても、依然日本の布教には厳しい現実が待ち受けていた。この現実の中でイエズス会はいかなる打開策を考えたのか、次節で検討する。

## (2) イエズス会の朝鮮への布教計画

イエズス会の宣教師が日本で布教活動を行ないながら、なぜ朝鮮の布教に熱意を示したのか。日本の布教が軌道に乗っていない段階で朝鮮の布教は何を意味するのかについて考察していきたい。

日本に進出してきたイエズス会の芳しくない布教状況について、いかに打開して行こうとしたのか。まず時期を遡らせて日本の布教に乗り出した頃のザビエルの構想を考察しよう。

ザビエルは日本を離れた翌年(1552)の1月29日、コチン(Cochin)でヨーロッパのイエズス会員に宛てた書簡に「日本の諸宗派は中国から伝えられたものです。中国が私たちの信仰を受け入れられるならば、日本で信じられている諸宗派は不信を抱かれることになるでしょう。」と書いた<sup>22)</sup>。ザビエルは日本で布教活動を行っている内に明の布教の必要性を強く感じるようになったのである。日本の布教に当たって抵抗に遭遇したことが間接的に読みとれる。ザビエルはこのような状況を打開して、日本におけるキリスト教の布教の進展をはかるためには日本に強い影響力を与えてきた明の存在が重要であると考えた。そこで、彼は明がキリスト教を受容するようになれば、日本へは自ずから布教できると信じたのである。同書簡で天文21年、明の北京に向かうと書き示した通り日本を離れて、彼は明の布教を目指して乗り出した。しかし、明への入国を果たせず入国目前の天文21(1552)年12月、現在の香港西方にある上川島で病死した。

このように日本の布教をより成功に導くために、ザビエルは明への布教を計画したが、その後日本に進出していたイエズス会の宣教師は朝鮮への布教に意欲を示したのである。この意欲は何を意味するのであろうか。

日本へ進出したイエズス会が、朝鮮に向けて布教の意欲を示したことは、ザビエルの日本宣教を引き継いだビレラの書簡から確認される。弘治2(1556)年、日本に着いたビレラは布教の役割を果たす中で病気にかかって元亀元(1570)年日本を離れた。翌年2月4日、ビレラがコチンでエボラ(Evora)のコレジョ(キリシタン神学校)の某イルマン

21) Luis de Guzman 『Hitoria de las misiones que han hecho los riligiosos de la Compania delesvs, para predicar el sancto euangelio en la India Oriental, y en los reynos de la China y Japon.』を、新井トシ氏が日本語訳して『グスマン東方伝道史』(上、天理時報社、1944年、下、養徳社、1945年)として刊行している。ここでは新井氏の日本語訳を引用する。下、517頁。

22) 河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』3(東洋文庫、平凡社、1994年)202~203頁。

(修道師)に送った書簡には次のように記している<sup>23)</sup>。

日本より海上十日路の所に高麗と称する一国あり。四年前予は同地に赴かんとせり。

(中略) 国人は色白し。予は同所に赴かんとせしが、戦争行はれしがゆえに赴かず。

この地よりシナ国王の居住する北京にいたることを得べし。

この書簡によると、イエズス会が日本で布教を行いつつも、朝鮮の布教まで計画していたことがわかる。つまり、永禄10(1567)年、朝鮮への布教のために出発する予定だったが、戦争によって朝鮮に渡るのを断念したのである。朝鮮布教の渡航を断念させたこの戦争とは、恐らく朝鮮に渡るための要所である北九州地域で起きた戦国大名同士の合戦であったのだろう。

ビレラは朝鮮人の肌色が白いと述べている。これは朝鮮に対する誤った情報を入手したのではなく、日本に上陸したザビエルも日本人を同じく白人と見なしていたのである<sup>24)</sup>。

さて、ここではアンダーラインの部分の朝鮮から北京に至ることができるという認識に注目したい。これは朝鮮への布教を計りつつ、明での布教をも念頭においているものと思われる。これは、日本の布教を円滑に行うために日本への影響力をもっている明への布教を切実に感じていたザビエルの構想を継承して意識した表現であろう。

当時、明が日本に影響力を行使していたかどうかはさておいて、イエズス会が日本の布教活動に当たってそのような判断をしたことが重要である。この観点からイエズス会の朝鮮と明への布教姿勢を評価しなければならない。つまり、明の布教は明だけに留まる問題ではなく、日本を初めとする東アジア全体の布教につながる問題であるというのがザビエルの構想と言えよう。

しかし、ザビエルが早い時期から明の布教を計画したにもかかわらず、イエズス会は明の布教にこぎ着けることができなかった。ザビエルが計画した明の布教は、その後日本のイエズス会ではなく、ゴアから直接きたイエズス会のマッテオ・リッチ(Matteo Ricci)によって実現され、ようやく永禄10(1582、中国暦：万暦10)年彼がマカオ(Macau)に上陸を果たした。日本に上陸したザビエルが明の布教を計画してから30年が過ぎていた。リッチは翌年から明の布教に乗り出して万暦17(1589)年北京に入ることができ、3年後にやっと明皇帝の神宗に面会して都での布教が本格的に始まったのである<sup>25)</sup>。このようにイエズス会は日本での布教を着実にを行うため明の布教の必要性を痛感はしていたものの、日本の戦国時代が終わりに近づく頃まで明の布教は実現しなかったのである。

このようにザビエルの構想からすると、東アジア全体の布教を考える上で、明の布教は重要な意味を帯びている。つまり、元亀2年、未だに明の布教が果たせていない状態での、イエズス会の朝鮮布教とは如何なる意味をもつのか。すなわちイエズス会が朝鮮への布教はもとより、朝鮮を経由して実は明への布教計画をもっていたとすれば、イエズス会の朝鮮の布教は明への進出の足場、つまり橋頭堡をつくるという意味になるのである。

もう一度、ビレラの書簡を見よう。元亀2年10月6日ゴアで彼がポルトガルのアビス

23) 村上直次郎訳『イエズス会士日本通信』(上・下、新異国叢書、雄松堂書店、1968年)286頁。

24) 前掲河野訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』3、202頁。

25) 平川裕弘『マッテオ・リッチ伝』(東洋文庫、141、1969年)。中山久四郎『利瑪竇伝』(『歴史地理』26-3・4、1916年、また29-3・5、30-1、1917年)。

(Avis)の住院の司祭に送った書簡からも朝鮮への布教意欲が現れている<sup>26)</sup>。

日本の他の方面三日路の所に其国語にてコーライと称し、我等がタルタリヤと称し昔より有名なる他の大国あり。此国は下りて大なる支那の国境に走り、同国の端と接する一の地に達すといふ。山の他方に在る国は上アレマニアなりといふ。此国民は色白くして好く戦ひ、騎馬に熟達し、馬上にて走りながら弓矢鎗及び剣を以て戦ふ。彼等は長髪を有し、絶えず獅子及び虎の狩獵を行ふこと其地に於て鹿及び兎を狩るが如し。予は同国に赴かんとせしが、当時途中に戦争ありて之を妨げたり。其の召さるる日未だ至らざりしならん。我等の主彼等を導きて光明を与へ給はんことを、アーメン。此の如く多数の異教徒其の信ずる所の外何もなしと考へ、其誤に欺かれ亡びんとするを見るは大なる悲哀なり。

朝鮮に対する地理や風俗が具体的に記されており、朝鮮への布教のために情報収集が一層進んでいるように見える。ここで戦争のため朝鮮に渡れなかったのは、神（主＝イエス・キリスト＝Jesus Christ）がまだ望んでいないからであるとし、朝鮮布教を進展させていない自分を慰めつつ、早く異教徒の朝鮮人に布教が実現できるように願っている。イエズス会の朝鮮への布教の意欲と意気込みが感じられる。この書簡の中で朝鮮と明は国境が接していることを明記しており、明への布教を意識していることも見て取れる。

引き続き、同年11月3日ビレラがゴアでイエズス会の総長のフランシスコ・デ・ボルジャ（Francisco de Borgia）に書いた書簡でも朝鮮への布教の決意が見受けられる。その中で「朝鮮での福音伝播という宝はその仕事やりこなせる価値のある人のために留保されるはずである。（中略）そこに朝鮮の司祭がいれば神様のために大いなる活動をすることができるようである。そしてあまり苦勞せずに日本の領主の協力を得て簡単に朝鮮に進出できるはずである。書簡を通して進言したいのはある大名は朝鮮にもよく知られており、我々が十分その地に入国することができるだろう。またそこで活動するようになる司祭に対しては日本から必要な助けを提供することができるはずである。なぜなら、毎年日本の商人がそこに出入りしているからである」<sup>27)</sup>とある。ここでイエズス会は朝鮮布教のために日本の戦国大名の活用を想定していた。その力を借りて朝鮮へ布教を実現しようとした日本の領主とはキリシタン大名か、あるいはイエズス会の宣教師に協力的な大名であったと思われる。その中でも地域から見ると、特に朝鮮と深く関わっていた対馬や北九州地方の大名を想定することができる<sup>28)</sup>。

また天正6（1578）年11月8日、アントニオ・プレネスティノ（Antonio Prenestino）の書簡の中でも「日本より遠く離れている野蛮人の島であるコーライに行つて福音をのべ伝えたい」と記しており、日本に進出していたイエズス会の朝鮮への布教に対する変わらない意欲を表している<sup>29)</sup>。

このようにイエズス会は東アジア布教の構想の一環として明の布教をにらみ、朝鮮の布

26) 村上直次郎訳『異国叢書耶蘇会士日本通信』（下、駿南社、1928年）217～218頁。

27) ローマのイエズス会本部古文書保管所、Jap.Sin.7 III,f,80（前掲朴『세스페데스（セスベデス）』329頁から引用した）。

28) 前掲松田・川崎共訳『フロイス日本史』1～12巻から整理してみると、ビレラが書簡を書いた元亀2年まで洗礼をうけた大名はそう多くない。九州地域に限定すると大村純忠と宇久純堯である。

29) 前掲朴『세스페데스（セスベデス）』326頁から引用した。

教計画を精力的に推進した。この構想が日本で活動していたイエズス会の宣教師によっていかに展開されたのか次章で分析する。

## 2. 豊臣秀吉軍の朝鮮侵略

本章では、16世紀後半における日本でのイエズス会の布教の実態と、文禄・慶長の役における戦場の状況からイエズス会の宣教師が朝鮮へ呼び寄せられる理由を追究して行く。

### (1) イエズス会の布教の変化

織田信長の死後、彼の後継者の豊臣秀吉はイエズス会の布教を保護してきたが、天正15(1587)年6月19日、九州出兵を終えると、従来の方針を翻して突然宣教師の追放の命令を出した。これによってイエズス会の布教にいかなる変化が生じてきたのか。次の史料から分析しよう。

定

- 一、日本は神国たる処、きりしたん国より邪法を授候儀、太以不可然事
- 一、其国郡之者を近付門徒になし、神社仏閣を打破らせ前代未聞候、国郡在所知行等給人に被下候儀者、当座之事候、天下よりの御法度を相守、諸事可得其意処、下々として猥義曲事
- 一、伴天連其智恵之法を以心さし次第ニ檀那を持候と被候と被思召候へハ如右日域之仏法を相破事曲事候条、伴天連儀日本之地ニハおかせられ間敷く候間、今日より二十日之間に用意仕可帰国候、其中に下々伴天連に不謂族申懸もの之ハ曲事たるへき事
- 一、黒船之儀ハ商売之事候間、各別に候条年月を経、諸事売買いたすへき事
- 一、自今以後、仏法のさまたけを不成輩ハ商人之儀ハ不及申しづれにても、きりしたん国より往還くるしからず候条、可成其意事

已上

天正十五年六月十九日

朱印<sup>30)</sup>

この文書の第一～三条から読みとれる宣教師追放の理由は一言で言えばキリシタンが神社(神々)や寺院(仏)を破壊していることである。つまり、キリシタンに改宗した人々が神社と寺院を破壊するという未曾有のことが起こっており、「伴天連」の宣教を認めれば仏教の教えを破壊することになるという主張と言える。このように秀吉は布教を禁止する口実として、従来の社会秩序を維持するとしている。しかし、実際はキリシタンの団結に対する警戒心が布教禁止の理由であった<sup>31)</sup>。

ところで、第四・五条で黒船(ナワ船=ポルトガル商船)との取引は禁止していない。キリスト教の布教(仏法の妨げ)ではない限り、誰でも来日することができるということから秀吉がポルトガル商船との取引を強く望んでいることがわかる。

30)『松浦史料館蔵』「豊臣秀吉朱印状」。

31) 松田毅一「1587年、アントニオ・ブレネスティーノの書翰」(『京都外国語大学研究論叢』22号、1982年)192頁では、追放令の理由を「キリシタンの教えは日本における身分ある兵士や重立った諸侯の間にひろまりつつある。これは余の好まぬところである。何故ならキリシタンの間には兄弟の間にも及ばぬほどの鞏固な団結があり、それが天下(日本の国王)に何らかの苦勞になりはせぬかと案ずるが故」と記している。



第三条の後半では今後におけるイエズス会宣教師の行動に触れて、20日以内に仕事を片付けて帰国するように命じた。そして、その20日間は身の安全を保障した。

そこで日本におけるイエズス会の初代の準管区長であったガスパル・コエリヨ (Gaspar Coelho) は平戸に退き、各地で宣教活動をしていた宣教師たちを同地を集めて今後の活動方針について会議を開いた。コエリヨがイエズス会総長に宛てた1588年度の日本年報によれば、「今こそ、血と死をもって我らの宣布する律法がいかに事実であるかを証明するにふさわしい時である。(中略) イエズス会の会員は一人として日本を出てはならぬ。しかし、その折関白殿へしかるべき満足を与えるよう、また我らが日本に留まっていることを見咎めて関白殿が我らに対し激怒を發さぬよう、最大限の配慮をなすべきである。」とある<sup>32)</sup>。

まず「宣教師追放令」が出てもイエズス会は日本から退去するのではなく、殉教の覚悟で残留潜伏して活動をする結論に達した。なぜなら、多くのキリシタンが司祭の不在によって霊的庇護を失うことを憂慮したからである。一方、秀吉を満足させて激怒させないとは布教に抵抗する勢力との対立を避けて異教徒との摩擦を生じさせないためであろう。そのため、イエズス会は目立った布教活動を控えるようになった<sup>33)</sup>。

このように「宣教師追放令」が出された後、イエズス会の布教活動に大きな変化が生じたものと推測される。まずこの変化を確認するためには布教の内容を分析する必要がある。

宣教師の異国民衆に対する布教活動を細分化して見ると、一つは本来宣教師の任務ともいべき未信者に対する宣教活動がある。もう一つはこの宣教活動によって布教に成功した民衆、いわゆる信じるようになった信者の管理活動である司牧を上げることができる。一般的に布教というのは、未信者をとり込んで宣教することに比重を置く前者と認識される。

ところが、「宣教師追放令」が発効されると、宣教活動を控える方針に転換し潜伏して司牧活動を行う後者に重点をおくようになった。このような方針の転換はコエリヨがイエズス会総長に宛てた1588年度の日本年報によく現れてくる。

(司祭が)豊後に留まっていたり、都の諸地方に潜伏したりしていた若干名は別だったが、その他はすべて既述の諸地方に分散していた。このため、これらの諸地方全キリシタン宗団の教化と司牧に意図的に従事することについては大きな便宜が生じた。我らが互いをゆるゆると訪ねあい、さまざまな集落や村落のキリシタンすべての告白を聴き教化をすすめることに十分な時間をかけた。これらの集落や村落の数はおびただしく、また当初は司祭たちが日本のさまざまな領国に分散していたから、今までは必要で十分な司牧が行なえなかった<sup>34)</sup>。

ここでイエズス会は、今までは前者の宣教中心に活動を行って、後者の司牧が十分ではなかったことを認めつつ、「宣教師追放令」を契機にして後者を充実することを明らかに

32) 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期・第1巻(同朋舎、1987年)4頁。

33) 一方、『イエズス会と日本』1・大航海時代叢書・第Ⅱ期・6(岩波書店、1981年)84~85頁の1590年10月14日アレッサンドロ・ビリニャーノが長崎でイエズス会総長に宛てた書簡では、イエズス会がキリシタン大名を糾合して「宣教師追放令」を発した秀吉に対抗しようと働きかけ、資金と武器弾薬を提供する計画も立てたことがあったのを記している。

34) 前掲松田監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期・第1巻、5頁。

している。そのため、宣教に反対する勢力との対立を避けて目立つ活動を控え、キリシタン大名や領主が支配する地方に潜伏した。

このように迫害を恐れて宣教師が前者の宣教活動を自粛したので、「宣教師追放令」後朝鮮への布教意欲が表に出なくなった。ひいては、このような現状では朝鮮の布教を事実上断念せざるをえなくなり、朝鮮を経由した明への進出も挫折した。つまり、イエズス会は朝鮮の布教より、今まで日本で行ってきた宣教の収穫である信者をいかにして守っていくのかという司牧に焦点を合わせたのである。

こうした時に秀吉が文禄・慶長の役を起こしたため、イエズス会がいかなる局面に遭遇していかに関与していくのか、次節で分析したい。

## (2) 朝鮮の戦場の状況

豊臣秀吉は全国統一を押し進める過程の天正13（1585）年の段階で大陸侵略の意図を示した<sup>35)</sup>。その後島津義久を服従させて九州の平定が終わると、朝鮮侵略の内容を具体化しつつ、その準備に取り組んだ。そして一番から九番までの渡海陣立てを編成すると<sup>36)</sup>、天正20（1592）年4月12日、一番隊の小西行長を主軸とした大名らを朝鮮の釜山に上陸させ、ここに文禄・慶長の役が始まった。

まず戦場がいかに展開されていくのかを中心に考察していきたい。

小西を中心とした一番隊の諸大名は初戦で釜山城を攻め落として東萊城でも勝利を収めた<sup>37)</sup>。（図1）から分かるように、その後次々と上陸した諸大名はそれぞれ侵略コースを決めて朝鮮の首都漢城を目指して北に進撃して朝鮮半島を縦断した。

日本軍の奇襲攻撃をうけた朝鮮軍は反撃する体制を整える間もなく押されていった。諸大名が順調に勝ち続けて漢城まで接近すると、4月29日国王は首都を放棄して避難した<sup>38)</sup>。その後一番隊の小西行長らは侵略開始からわずか20日後の5月2日に漢城を制圧した<sup>39)</sup>。

ほかの諸大名も相次いで漢城に入り、最後の八番隊を指揮した宇喜多秀家も五月八日には漢城入りを果たした。朝鮮半島を縦断して北進し漢城を制圧した諸大名は、朝鮮の各地方を分担する「八道国割」を行って各々割り当てられた地域に進撃した<sup>40)</sup>。これによって小西行長は平安道を目指して進撃するようになった。この平安道は明と通じる道の要所である。朝鮮の国王が明との国境沿いに位置する義州へ避難したこともあり、その後を追って小西は義州を目指して朝鮮半島を縦断しつづけた。一方、ほかの諸大名は分かれて内陸のほうに進撃した。

日本軍の奇襲攻撃をうけた朝鮮軍は日本軍が漢城に到達するまで一方的に攻め続けられたが、その間義兵が組織されゲリラ作戦を繰り広げて日本軍に打撃を与えるなど抵抗を強

35) 天正13（1585）年9月3日「伊予小松一柳文書」。

36) 『大日本古文書』家わけ8、毛利家文書、「豊臣秀吉高麗陣陣立書写」932。

37) 前掲松田監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期・第1巻、279頁。

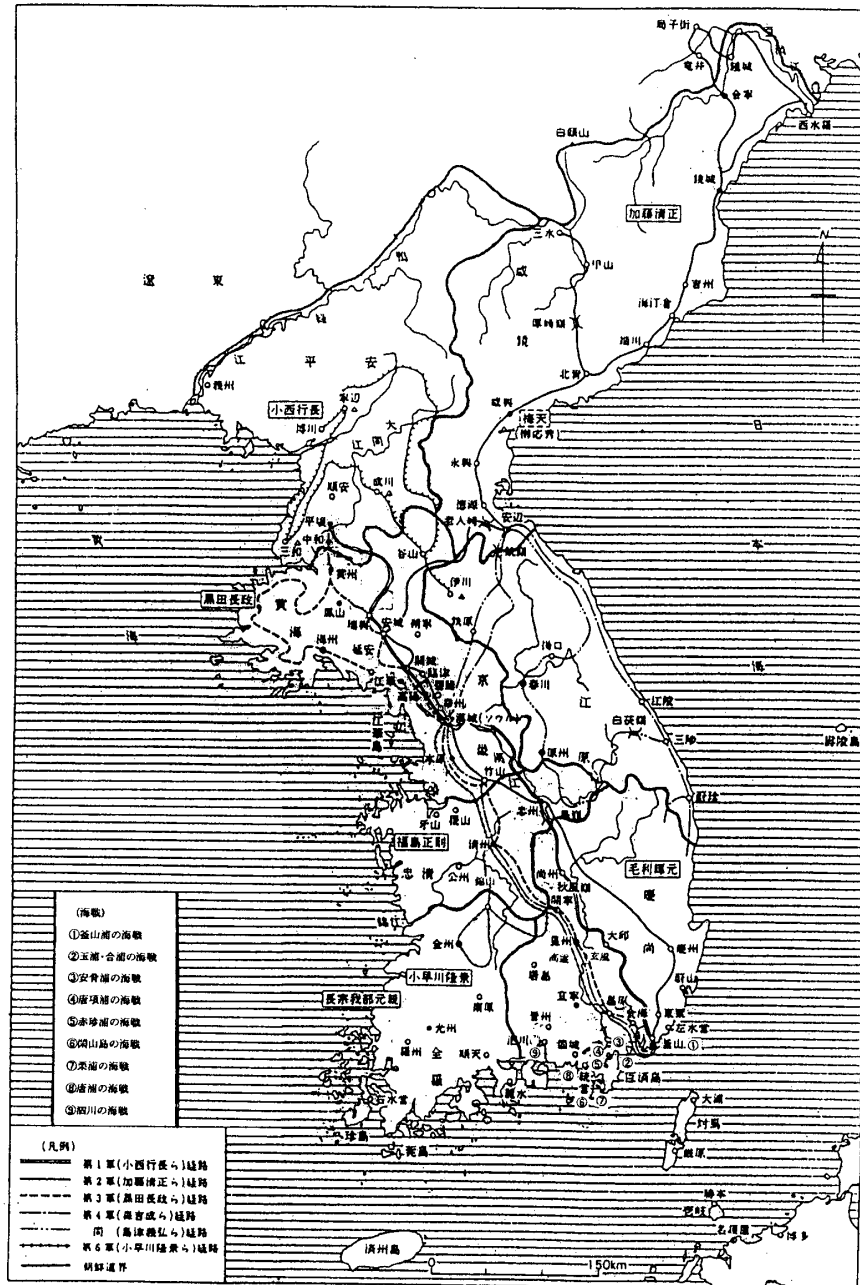
38) 『宣祖修正実録』宣祖25年4月晦日。

39) 天菰の『西征日記』でも小西の注進状でも5月2日漢城を陥としたと記している。

40) 「八道国割」は平安道は小西行長、咸鏡道は加藤清正、黄海道は黒田長政、江原道は森吉成、忠清道は福島正則、全羅道は小早川隆景、慶尚道は毛利輝元、京畿道は宇喜多秀家であった。（図1）を参照されたい。

めた。次の(表1)は日本軍の侵略開始から約一年間にわたる主な義兵の動きをまとめたものである。この義兵は日本軍の侵略をうけて様々な階層の人々が自分の生活の場を、また国を守るため自主的に立ち上がったものである。義兵の一人である金千鎰は挙兵の理由を、「聞京城失守、号慟幾絶、既而奮曰、吾志徒何為、国既有難、君父播越、吾以世臣、豈烏鼠求活、吾挙義赴難、強弱不敵、有死而已、此可以報」<sup>41)</sup>と述べている。首都が陥落

図1 日本軍の朝鮮侵略経路(文禄の役)



41) 『再造藩国志』2、壬辰6月条。

されて王が避難することになり、私たちが惨めな生活を強いられているので挙義して死を覚悟して戦うとしている。漢城の陥落を契機として義兵の活動を開始したことが分かる。(表1)からも5月に入って義兵の活動が活発になることが分かる<sup>42)</sup>。

一方、李舜臣が参戦し海戦で連勝して日本軍の補給路が遮断されるようになった。(表2)は(表1)と同様の時期に李舜臣が活躍を整理したものである。特に、文禄元年7月

(表1) 1592(宣祖25・文禄元・万暦20)年における朝鮮義兵の活動

月 日	人 物 及 び 内 容	出 典
4 月 21 日	郭再祐が慶尚道の玄風で義兵を組織	「乱中雑録」、「朝鮮宣祖実録」
5 月 中 旬	金沔が慶尚道の高霊で義兵を組織	「燃藜室記述」
5 月 11 日	慶尚道の玄風で朝鮮民衆が日本軍を襲撃	「吉見元頼朝鮮日記」
6 月 1 日	高敬命が全羅道の全州で義兵を組織	「乱中雑録」
6 月	金千鎰が京畿道で日本軍と戦う	「再造藩邦志」
7 月 3 日	趙憲が忠清道の公州で義兵を組織	「乱中雑録」
7 月 9 日	日本軍と戦って高敬命が戦死	「乱中雑録」、「朝鮮宣祖修正実録」、「壬辰録」
8 月 7 日	朝鮮の義兵が決起	「黒田長政記」、「黒田家譜朝鮮陣記」
8 月 18 日	趙憲・霊圭が全羅道の錦山で日本軍と戦う	「乱中雑録」、「朝鮮宣祖修正実録」、「聞韶漫録」
9 月 1 日	李廷毓が黄海道の海州で義兵を組織	「朝鮮宣祖実録」、「行年日記」、「黒田長政記」
9 月 15 日	鄭文孚・鞠世弼が咸鏡道で日本軍と戦う	「壬辰録」、「朝鮮宣祖修正実録」
10 月 10 日	郭再祐・金時敏が慶尚道の晋州で日本軍と戦う	「乱中雑録」、「朝鮮宣祖修正実録」
10 月 16 日	咸鏡道で柳応秀が日本軍と戦う	「壬辰録」、「高麗日記」、「普聞集」
11 月 15 日	鄭文孚が咸鏡道の吉州で日本軍と戦闘	「農圃集」、「壬辰録」、「朝鮮宣祖修正実録」

(表2) 1592(宣祖25・文禄元・万暦20)年における李舜臣の海上活動

月 日	海 戦	出 典
5 月 7 日	玉浦・合浦海戦で藤堂高虎を撃破	「壬辰状草」、「高麗船戦記」
5 月 8 日	赤珍浦で日本軍撃破	「壬辰状草」
5 月 29 日	四川海戦で日本軍撃退	「壬辰状草」、「乱中日記」
6 月 2 日	唐浦海戦で日本軍を破る	「壬辰状草」
6 月 5・6 日	唐項浦海戦で日本軍撃破	「壬辰状草」
6 月 7 日	栗浦海戦で日本軍を破る	「乱中日記」
7 月 7 日	閑山島の海で日本軍撃破	「壬辰状録」、「朝鮮宣祖実録」、「脇坂記」
7 月 9 日	閑山島・安骨浦で日本軍を破る	「壬辰状録」、「朝鮮宣祖実録」、「高麗船戦記」
7 月 14 日	閑山島・安骨浦海戦で日本軍撃破	「脇坂文書」、「高山公実録」
9 月 2 日	釜山浦付近の海戦で日本軍撃破	「壬辰状録」、「朝鮮宣祖修正実録」

42) 朝鮮の義兵に関しては、前掲貫井『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵の研究』を参照されたい。

22日「朝鮮人たちは勇気を挽回していき海上では（日本の）大艦隊を壊滅させ多数の兵を殺戮し、三百隻以上の船舶を失わせ……」とあるように<sup>43)</sup>、朝鮮の水軍が日本軍に大打撃を与えた。また、イエズス会の1591・92年の年報からも、「艦隊と艦隊の海戦を交えねばならぬとしたら、日本人たちが彼らより劣勢であることは疑う余地がないところである」のように<sup>44)</sup>、海戦で日本が劣勢になっていることを記している。

それに加えて、5月8日朝鮮から日本の侵略に対する報告に接した明の神宗は、まず日本軍が直接中国大陆へ侵略してくることに備えて遼東・山東の防備を指示した<sup>45)</sup>。さらに、朝鮮への援軍を決め、明軍の部隊が6月15日朝鮮との国境である鴨緑江を渡り、平壤城の攻防から参戦するようになった。

このように義兵の活発な活動と李舜臣の海での活躍、そして明軍の参戦によって戦争は新たな局面に突入した。勢いよく進撃し続けた日本軍は苦戦を強いられて、平壤城の攻防に当たって明軍からの提案を検討するようになった。明の援軍として朝鮮に到着した沈惟敬が小西行長に和解を申し込んだ。平和同盟を結ぶために豊臣秀吉に使節を送り、回答が得られるまで二ヶ月間休戦するという提案だった。小西は苦戦の中で明軍の提案を受け入れるざるをえなかった。

戦場で日本軍が追いつめられていた状況を確認しよう。

己の軍隊も他の諸将士の軍隊も同じく食糧が欠乏し、極度の飢を訴へていたからである。その原因は朝鮮人が己の国に多数の日本軍勢が進入し王は国を逃れて支那に渡った事を知って食糧全部を持って山、山岳に入り、運搬し難いものは敵に使用されないやうにと焼棄し、或は破損したからである。日本人は太閤様にこの困窮を訴へたが知らぬふりをし、又種々なる便宜的の口実を以て彼等を宥めて何等送らなかった。然し諸将士が度々書信で追求した時にはその要求の半分にも充たない僅かのものを送った。しかもその僅かのものが地理的に精しい朝鮮人又はスパイに略奪された。斯くして日本人の多くは各地で病気になり又死去し、或は絶望して帰国した。然し乍ら規律も協定もなかった故に途中に待伏せている朝鮮人に殺害された。斯くの如くにして既に朝鮮に渡った軍勢中五万余人が欠けた。諸将士は悉くこの難儀に苦しんだが、ドン・アグスチン（小西の洗礼名）はそれに比較ならないほど苦しんだ。日毎に死去する多数の兵士、それに対するその土地及び日本での救策に期待できず、就中この企図の発起人たる太閤様の気持、今後の事もわからずして苦慮した。而して支那の大將が彼に申し出た和解を快諾した。経験あり、思慮ある彼は支那人及び朝鮮人を信用していなかったがその結果を待っていた。朝鮮及び支那人は日本の困窮を見て一層苦しめることにした<sup>46)</sup>。

ここで日本の戦闘部隊に対する補給が確保できず、いかに苦しんでいるかが明らかである。「朝鮮人又はスパイ」、つまり義兵に襲撃されて略奪されたり、殺害されたりしたからである。このように物資の補給がほぼ閉ざされたため日本軍は食糧などを現地調達に頼るざるをえなくなったが、さらに追い打ちをかけたのは日本軍に追われて逃げる朝鮮軍が食

43) 前掲松田・川崎共訳『フロイス日本史』12巻、152頁。

44) 前掲松田監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期・第1巻、281頁。

45) 『明神宗実録』万曆20年5月己巳条。

46) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、596～597頁。

糧が敵に回らないように焼却したことである。朝鮮人は運べる食糧をもって山岳に入って山城を築き、補給路が南北に長く伸びるとゲリラ作戦に転回した<sup>47)</sup>。

補給が困難になったのは義兵の活動だけではなく、李舜臣の海上戦での勝利もその一つの原因であった。すでに（表2）から見たように、5月に入って李舜臣が海上で連戦連勝することによって日本からの物資の補給がますます困難に陥るのに拍車をかけた。

こうした中で病気や飢え、そして戦死者が続出し、絶望して帰国する兵士がでた。兵士の志気が落ちて、日本としても明の休戦の和解の提案を受け入れざるをえなかったのであろう。ここで兵士の離脱が大きな問題となっているが、秀吉とキリシタン大名はこの情況にいかに対処していったのか。次節では、戦場の兵士の離脱問題に対する秀吉及びキリシタン大名の対策を中心に分析する。

### (3) イエズス会宣教師の従軍要請

「宣教師追放令」が出されて迫害の危険がある中で戦場のキリシタン大名<sup>48)</sup>は如何なる意図でイエズス会の司祭を戦場に呼んだのか、その理由と経緯を戦場の状況を通して探る。

明と和解の交渉を図りながら平壤城攻防で負けた小西行長は碧蹄館の戦闘では明の李如松に打撃を与えたものの、漢城に後退した。引き続き明との交渉を行いつつ、文禄2（1593）年4月18日、秀吉の命令によって日本軍は漢城から、さらに朝鮮半島の南部（釜山の周辺）に撤退した。日本軍は同地への駐屯をもくろみ、各地に12ヶ城を築いた<sup>49)</sup>。日本軍の撤退は、奇襲攻撃を受けた朝鮮側が次第に反撃に出て、補給困難と兵士の損失によって戦況が不利になったのが大きな原因だっただろう。

戦況の不利についてルイス・フロイス（Luis Frois）が次のように記している。「（朝鮮軍が）陸上では関白の甥に委ねられていた八つの城を奪還し、（その際）同じく多数の兵を殺戮し、日本人に対して優位に立ち始めたからである。このために、またひどい食糧不足のために、日本人はおびたしい死者や病人が続出し、大勢が日本に逃げた。ここでもかしこでももはや日本人はこの朝鮮遠征に成功する見込みを失ってしまった。」<sup>50)</sup> とある。戦況が日本側に不利に展開したのである。明らかに勝利の見込みがない無謀な戦争であったにもかかわらず、戦闘が持続したことで数多くの兵士が失われる結果につながった。この現実を目の当たりにした兵士が戦場を離脱したのである。

文禄2年5月15日、小西行長らは和解を論議するために明の沈惟敬とともに名護屋の秀吉のもとに引き帰った。ここで秀吉は戦場を離脱して帰国する兵士の問題で悩んでいたことが分かる。次の史料を分析しよう。

名護屋に集った二十万人の中、ドン・アグスチン（小西）及びその諸将が引率した軍勢以外に十五万人を朝鮮に送った。そして彼等が上陸した時、日本から朝鮮に行った船全部を送返すやう、彼自身それで残る五万の兵を率いて行くからとドン・アグスチ

47) 姜在彦『新版朝鮮の歴史と文化』（明石書店、1996年）28頁。

48) 洗礼をうけた小西行長、宗義智、有馬晴信、大村喜前、松浦鎮信、五島純玄、天草種元、黒田孝高がキリシタン大名である。

49) 前掲松田・川崎共訳『フロイス日本史』2巻、301～302頁では秀吉の命令によって築城が行われたことを記している。同じく「鍋島直茂譜考」でも確認できる。

50) 前掲松田・川崎共訳『フロイス日本史』12巻、152頁。

ンに認めた。然し実際は、朝鮮に渡った人々が戻らぬやうにと船で送ったのである<sup>51)</sup>。

秀吉は講和のために引き帰った小西行長に、名護屋に駐屯していた15万人の兵士を追加派遣して自分も5万人の兵士を連れて朝鮮に渡るとした。それで朝鮮に渡った船を引き返すように命じたが、これは実は戦場を離脱して帰国する兵士を阻止する秀吉の方策であった。

また、文禄元（1592）年5月16日加藤清正に宛てた文書にも同じように朝鮮に渡航した船を帰還させていることを示す記述がある。一部分のみを検討しよう。

一、急度御渡海なさるべく候条、先々越候者共、船有り次第、早々に差越すべく候、大少ニ寄らず一隻も残らず差戻すべく候、油断せしめ相越さず族在るに於いては曲事たるべく候、船頭共乱妨を仕り船につみ遅れ相越すべく間、其船主として固く相改め奉行を付け相越すべき事<sup>52)</sup>

日本側の史料には朝鮮に渡航した船を帰す秀吉の命令に対する理由は書いていないものの、船を帰還させる方針は明記している。戦場を離脱して勝手に帰国した兵士だけではなく、朝鮮に投降した兵士もいた<sup>53)</sup>。

一方、離脱する兵士の問題は秀吉だけではなく、戦闘に臨んだ諸大名にとってはもっと悩ましいことであった。なぜなら兵士が戦って勝利することは大名の軍功につながるからである。しかし、戦場を離脱する兵士が多くなると軍功どころか自らの命も保持できなくなる。朝鮮の戦場で一般的に採択した軍功の証拠としては敵の鼻・耳・首の獲得、あるいは一番乗りなどであった<sup>54)</sup>。このようにして大名が軍功を上げると秀吉から恩賞を得るが、逆に軍功とはかけ離れた行動をした場合は所領を没収されたりしたのである。

例えば、文禄2（1593）年卯月11日小早川隆景に宛てられた「豊臣秀吉朱印状」によれば、「今度大明人数被出之砌、其方事為先懸、抽粉骨之由、被聞召届候、就其為褒美、御馬一疋被遣之候」とある<sup>55)</sup>。秀吉が朝鮮に援軍として参戦してきた明軍に向かって善戦した小早川隆景に褒美として馬一頭を与えたのである。一方、同年5月1日黄海道鳳山番城を放棄して逃亡した大友義統に対しては豊後の領地を改易した<sup>56)</sup>。

このような戦場の厳しい条件のもとで離脱する兵士を防止していかん軍功を上げるかは諸大名の課題であった。そこで諸大名は従軍僧侶を活用して軍隊をまとめようとした<sup>57)</sup>。

51) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、592頁。

52) 『東京大学史料編纂所蔵』「加藤文書」。

53) 貫井正之「沙也可」（『秀吉と戦った朝鮮武将』六興出版、1991年）。また、前掲同氏「降倭論」『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵の研究』を参照されたい。

54) 琴乗洞『耳塚』（二月社、1978年）には、当時切り取った首や鼻、そして耳の数が詳細に調べられている。

55) 『大日本古文書』家わけ11、小早川家文書、「豊臣秀吉朱印状」348。

56) 『大日本古文書』家わけ8、毛利家文書、「豊臣秀吉朱印状」894。また、肥前の波多信時も臆病と怠慢を責めて改易した（『大日本古文書』家わけ16、島津家文書、「豊臣秀吉朱印状」954・391、『佐賀県史料集成』古文書編、第3巻、鍋島家文書、「豊臣秀吉朱印状」54）。これと同じ内容が前掲松田・川崎共訳『フロイス日本史』2巻、307～308頁でも確認できる。

57) 例えば、鍋島直茂には肥前佐賀泰長院の是琢、小早川隆景には安国寺の恵瓊、吉川広家には宿禰俊岳、小西行長・宗義智には花園妙心寺の天荊や博多聖福寺の景轍玄蘇と竹溪宗逸、太田一吉には豊後の安養寺の慶念が従軍している。従軍僧侶の役割は祈願以外にも様々な部分まで及んでいる。稿を改めて論じたい。

例えば、島津氏の場合は面高連長坊俊昌が書いた慶長2年12月15日の日記に、次のように「御祈念に光明院大日寺心澄御参候」<sup>58)</sup>と戦場での僧侶の活動の一断面を書き記している。心澄がどのような僧侶か定かではないが、祈願をするために戦場の部隊を訪ねているのは明確である。恐らく、彼は戦場で島津軍の無事と戦勝を祈ったのであろう。

ところが、特にキリシタン大名の小西などは仏教徒の兵士のみならず、多くのキリシタン兵士を抱えていた。キリシタン大名は苦戦した戦場でキリシタン兵士をまとめる必要性を感じた。そこでキリシタン大名の小西や宗義智などは僧侶とは別に、キリシタン兵士のためにイエズス会の司祭を呼び寄せることにした。すなわち、「ドン・アグスチンその他のきりしたん諸将が聴解、伝道のできるばあでれの派遣をばあでれペトロ・ゴメスに依頼した」<sup>59)</sup>とあるように、ドン・アグスチンなどのキリシタン大名がイエズス会の準管区長であったペトロ・ゴメス (Pedro Comez) に依頼した。そこで、当時有馬にいたグレゴリオ・デ・セスペデス (Gregorio de Cespedes) が従軍司祭に選ばれたのである<sup>60)</sup>。

「宣教師追放令」の中で戦場のキリシタン大名らが、聴解と説教を名目にしてイエズス会に司祭の従軍を積極的に働きかけた。フロイスも「かねてより、朝鮮にいたキリシタンたち、とりわけ下の地方のキリシタンは、靈的な必要から自分たちの告白を聞き、秘蹟を授けてくれる司祭を派遣してほしいと副管区長に対して懇願していた」<sup>61)</sup>と記述しており、宣教師の従軍要請は司牧のためであった。「下の地方」とは豊後以外の九州地域を指しており、特にこの地域はイエズス会宣教師の上陸地でもあってキリシタン信者が多い。

この際、キリシタン大名らが宣教師の司牧活動を利用しようとした理由は、「宣教師追放令」以後イエズス会が布教における方針転換をしたことを把握したからであろう。それに加えて第1章で述べたように、ガスパル・ビレラ (Gaspar Vilela) が朝鮮布教のために大名の力を借りようとしたことを逆手にとって、大名がそのことを利用した可能性もある。ともかく、従軍宣教師の司牧活動をもってキリシタン兵士を慰撫しつつ、苦戦を乗り切って軍功を収めようとしたのである。すなわち、キリシタン大名らがイエズス会の宣教師に従軍を要請したのは、キリシタン大名が真にイエズス会の宣教と司牧活動を手伝う意識で戦場に呼び寄せたというよりは、自分自身を含む兵士に戦場での恐怖などを慰撫してまとめるためだった。このようにイエズス会の従軍宣教師の活動が兵士の慰問活動であったという見方は、すでに山口正之・金良善両氏の研究によって指摘されている<sup>62)</sup>。

以上のように朝鮮の戦場で追いつめられた兵士に安堵感を与えるイエズス会の宣教師の役割、つまり慰問使として従軍したという観点は、キリシタン大名らの立場に立った理解

58) 「面高連長坊高麗日記」(近藤瓶城編『改定史籍集覧』第25冊、臨川書店、1991年)。「島津家高麗軍秘録」(『統群書類従』20、下)によれば、面高連長坊俊昌は修験者であったが、文禄3(1593)年島津忠恒に従って朝鮮に渡ったとする。「面高連長坊高麗日記」は、その際彼が書いたものである。

59) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、623頁。

60) セスペデスの個人に関しては、前掲朴『세스페데스(セスペデス)』2～34頁と前掲山口第5論文の739～744頁を参照されたい。

61) 前掲松田・川崎共訳『フロイス日本史』2巻、261頁。そして副管区長は準管区長を意味する。天正8(1580)年イエズス会は日本を三つの布教区に分けてそれぞれに教区長を、その上に布教長(準管区長)を配置した。

62) 前掲山口第5論文、第2・3・4論文と前掲金「壬辰倭乱 従軍神父 세스페데스의 來韓活動과 그 影響(壬辰倭乱における従軍神父セスペデスの來韓活動とその影響)」。



と言えよう。では、イエズス会の宣教師がキリシタン大名の要請に応えるために、言い換えれば戦争を助長するために戦場に行ったのか。次章でセスペデスの一連の行動から従軍に応じたイエズス会の思惑を考察する。

### 3. グレゴリオ・デ・セスペデス (Gregorio de Cespedes) の戦場での活動

本章では、イエズス会の司祭であるセスペデスがキリシタン大名の従軍要請をうけてなぜ緊迫した戦場に乗り込んだのか。戦場の活動の分析を通して、イエズス会側の意図を追究する。

#### (1) セスペデスの宣教活動

「宣教師追放令」が出されて、迫害を回避しつつ司牧活動を中心とする方針を決めたイエズス会が、なぜ危険をおかして身を曝しながら緊迫した戦場に向かったのか。この理由を探るために、まずセスペデスが朝鮮に向かって出発していく過程を通じて司祭の意図を探って見たい。

キリシタン大名の従軍要請に応じて、文禄2（1593）年12月初、セスペデスは日本人伝道師や従者とともに対馬に出発した<sup>63)</sup>。セスペデスが対馬に到着した時、「ドン・アグスチン（小西行長の洗礼名）の娘の宗義智の妻のドーニャ・マリヤが出迎えて、キリシタン信者のその一族の人々に聴解して、島の主官たちに伝道した。対馬に滞在中は忙しい毎日を過ごして20名の主官と多数の一般人に洗礼を授けた。」とする<sup>64)</sup>。対馬で朝鮮に渡るチャンスを見計らっている間も積極的に宣教を行い、毎日未信者と接する忙しい日々を過ごしていたのである。

このようにセスペデスは朝鮮に渡る旅程中の対馬で司牧活動を行いつつ、未信者に対する宣教を積極的に行ったことが分かる。つまり、「宣教師追放令」以降前者に中心を置いたイエズス会の方針からはかけ離れた活動であったと言えよう。セスペデスは司牧より宣教活動に専念していたような活動ぶりである。

その後苦勞してセスペデスが朝鮮に渡った<sup>65)</sup>のは、日本軍が朝鮮の南部に撤退して約八ヶ月が経った文禄2年12月末であった。日本軍は城を構えて明との交渉を図りつつ、交渉を有利に導くために朝鮮・明軍とは対峙していたが休戦状態であった。

朝鮮に着いて、まずセスペデスは小西行長の城に赴いた。「小西は城におらず兄弟のビヤンテが代わりに迎えた。それで2日後に対馬の宗義智及び他の将士と共に帰ってきて、対馬であったことについて深く感謝し、ばうちずも及び説教を聴きたい人が多数いるので部下のいる城に来るように頼まれた。セスペデスはドン・アグスチン及び城中の人々の聴解をしていくとし、まず従者を送った。セスペデスは程良い時に通知をうけてそこに赴き、

63) 前掲松田・川崎共訳『フロイス日本史』2巻、262頁。文禄2年12月に書かれたと推測されるセスペデスの書簡。

64) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、623頁。

65) 前掲松田・川崎共訳『フロイス日本史』2巻、262頁のセスペデスの書簡から渡航過程をもっと具体的に見ると、同月21日セスペデスは鰐浦から60隻の船団とともに朝鮮へ出発したが、激しい荒波によって渡ることができず翌日鰐浦にひき帰った。それで鰐浦でクリスマスを過ごすことになり、再び同月27日に出発して朝鮮に渡った。結局、朝鮮に渡るまで対馬で18日間留まることになったのである。

対馬の宗義智の甥及び諸将士にばうちずもを与えた。そして、昼のみならず、夜の大部分を働かなければならなかった。」と記している<sup>66)</sup>。

ここで、まずセスペデスは聴解や説教の司牧活動を行い、そして「ばうちずも」(baptism=洗礼)を授けて宣教活動をした。なお、次のように戦死者の葬儀にも携わった。「朝鮮に出陣し、両親から離れて戦死する兵士に同情を寄せた豊後の一将士は、すでに彼等の肉体には何等手の施しやうもないがにま(靈魂)を滅しないやうにとその人達をばうちずもした。斯くしてあらゆる機会に死の危機にある者には直ちにばうちずもを与へた。そのため彼の士卒は常に腰に聖水の入った瓶をさげていた。この方法で200余名のあたまを天に送った。若しもきりしたんがこの事に気付いたならば、この方法で吾々の主にもっと多く奉仕が出来得たであろう。」とある<sup>67)</sup>。

このようにセスペデスが小西の城から活動をはじめたが、その後の戦場でのはっきりとした足取りはつかめず、断片的にしか把握できない。キリシタン大名の城を巡回して宣教や司牧活動を行ったらしい。

ところで、セスペデスは本来従軍の要請の中心だった聴解と説教はもとより、洗礼を積極的に授けた。洗礼を授ける行為は司牧活動を要請したキリシタン大名の要求より、一步踏み込んだ宣教活動である。未信者からセスペデスの従軍の事実が漏れると迫害の危険性があるにもかかわらず、大胆に宣教活動を行ったのである。このようなセスペデスの諸活動から従軍に応えたイエズス会の思惑がかいま見える。つまり、セスペデスは司牧活動を行う方針を純粋に戦場で実践しようとした一方、この司牧活動から一步踏み込んで宣教活動を行った。このような宣教活動は「セスペデス師が長崎から朝鮮へ布教のために渡したことに触れ……」という記述から見て<sup>68)</sup>、従軍に応えた当初の方針として決められていたのである。この戦場での宣教が従軍に応えたイエズス会のもう一つの狙いだった。

また、次の史料はセスペデスが従軍した意図を語っている。つまり、「関白殿に対してもっている恐れさえなかったなら、もっと多い人々に洗礼を授けられたはずである。なぜなら、司祭はひそかに隠れて過ごしており、彼の存在に対しては信用できる人だけが知っていた。」とある<sup>69)</sup>。

66) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、623～624頁。

67) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、658頁。滞在期間中のセスペデスの活動であるが、前掲山口「十六世紀朝鮮キリスダンの黎明」の13頁で氏は『南蛮興廃記』の記事から、「然るに秀吉公朝鮮征伐の時は、朝鮮も運同うして乱世の時なれば、八道の人民寺院の僧徒、悉く深山幽谷に遁隠る。此の寺僧と心得て、在陣七ヶ年の間だ討死又病死の者を山野にも捨て難く親しき者ども打寄っては、向寄々々の寺院に送り葬りしより、何となく馴染邪法とは夢知らず、慶長三年の冬、和軍帰朝の船に多く乗せ来れり」のように引用して、朝鮮の三道(慶尚道、全羅道、忠清道)にある「明き寺」を本拠にして戦死戦病者の埋葬及び看護を、そして戦死した遺体を帰国船に乗せて帰国させたとする。この記事による推測は『グスマン東方伝道史』と多少合致する部分がある。ところが、戦場でセスペデスはなるべく人の目に見つからないように行動をとっていたので、明き寺を中心に縦横無尽に活動したとは考えられない。なぜなら、「宣教師追放令」を意識して注意を払いつつ戦場で活動したからである。したがって、江戸時代に編纂された『南蛮興廃記』の記事をそのままではなく、ほかの史料と照らし合わせて総合的に考察する必要がある。

68) 前掲松田・川崎共訳『フロイス日本史』2巻、262頁。

69) Francisco Pasio, Carta annu de Japon de 1594, ローマイエズス会本部古文書保管所, Ms.JAP,SIN 31,f 94 v. (前掲朴『セスペデス(セスペデス)』82頁から引用した)。

戦場で隠れて過ごさざるをえなかったため、宣教に手を伸ばしつつももっと積極的に行なえなかったことに未練を示している。「関白殿に対してもっている恐れ」とは「宣教師追放令」による迫害の恐怖であろう。この恐れさえなかったら貪るように宣教に取り組んで洗礼を授ける意向であった。したがって、戦場での活動にかなり慎重に取り組み、ほとんど隠遁の状態で信用できる人々を中心に活動を行った。危険性を背負っていたとはいっても宣教活動、つまり洗礼を授けたことは従軍に応えたイエズス会の隠された意図の現れだと言えよう。

ところが、かつてガスパル・ビレラ (Gaspar Vilela) が計画した朝鮮の人々への布教活動はできなかった。なぜなら、戦場で日本軍が敵とした朝鮮の民衆と接触するのはほぼ不可能だったし、またセスペデスがほとんど人に見つからないように隠れて過ごしたからである。したがって、文禄・慶長の役を通してイエズス会が明へ布教をするための足場を朝鮮に構築することはできなかった。

このようにセスペデスは司牧のかたわら、宣教活動に精力的に取り組んでおり、従軍に応じたイエズス会の思惑を浮き彫りにした。次節では朝鮮に渡航しながら朝鮮の民衆に直接布教することができなかったセスペデスがいかなる行動をするのか考察する。

## (2) セスペデスの帰還

戦場の朝鮮では民衆への布教が不可能だったので、イエズス会は朝鮮を経由した明への布教計画を放棄したのだろうか。この点を念頭においてセスペデスが日本に引き揚げることについて検討して行きたい。

1594年3月22日、準管区長のペトロ・ゴメス (Pedro Comez) がイエズス会総長に送った書簡を検討しよう。

私は昨日セスペデス神父の書簡を受け取りました。彼は朝鮮で小西と他のキリシタン大名と共にいる日本人に聴解を行っています。(中略) 書簡で本人にいわく、明と日本との間に開かれている平和会談に参加する明の一人の将帥が到着したとしました。有馬によってアグスチン (小西) とこの将帥が招待された時、セスペデス神父はアグスチンの指示でこの将帥を見るためにそこに行きました。セスペデスはしばらく彼と話したが、セスペデスは彼に私たちは日本にただ神様の教理と救援の途を伝道するためにきたと言いました。また、日本人は判断力があってこれらを受け入れたとしました。それでもし神様の教理を明で自由に伝道することができるように、明の皇帝が許せばそこでも同じことをやるとしました。明の将帥は皇帝とその側近の許可が得られるように努力しますと答えました。(中略) 私は神様がどのように解決して下さるのか分かりません。フランシス・ザビエル (Francis Xavier) 神父が神様の教理が日本を通じて中国に入るだろうとおっしゃったのを私は何回も聴いたことがあります。あの明王国が神様の慈悲と信仰心をもつように神様の恵みがあるように祈ります。<sup>70)</sup>

まずアンダーラインの部分に注目したい。ここで、ザビエルが計画した明の布教をセスペデスが受け継いで実践しようとする意欲が読みとれる。つまり、ザビエルの構想が日本

70) ローマイエズス会古文書保管所, Jap, Sin, 12 I, f. 182. (前掲朴『세스페데스 (セスペデス)』33頁から引用した。)

のイエズス会内部で受け継がれていたのである。従来は朝鮮を経由地として明の布教を考えていたが、この時平和会談に臨んでいた明の将帥に直接対面して明の布教に関する要望をしたのである。これは朝鮮民衆、あるいは官僚を通じた明の布教の試みではなかったが、朝鮮半島で明の布教の交渉が行われたという意味で、朝鮮半島がイエズス会の明への進出の橋頭堡としての役割を果たしたと言えよう。

ところが、「宣教師追放令」が発効している中で、平和会談にきた明の将帥にセスペデスを会わせたのは小西にとっても、またセスペデスにとっても一つの賭けであったと言えよう。史料の中では小西の指示による明の使者との面談と書かれているものの、恐らく実際はセスペデスの強い要望によって成し遂げられたものと考えられる。なぜなら、「将士達は太閤様が調査官を送ってもばあでれのいないやうに、ばあでれ及びその従者はこの場合長崎に戻るのが至当だと考へた」と<sup>71)</sup>、ルイス・デ・グスマン（Luis de Guzman）が記しているように、この後小西が秀吉の調査官を恐れてセスペデスを帰国させたからである。

いずれにせよ「宣教師追放令」が戦場の活動に重くのしかかり、セスペデスは日本に戻ることになるが、その引き金になったのが小西行長と加藤清正との関係であった。つまり、小西と加藤とのライバル意識について多くの史料が語っているが、それは互いに軍功をあげることに對する競争であった。忠州の戦闘で勝利し都の漢城を目指して進撃した小西と加藤の関係は次のように示されている。

虎之助（加藤）はドン・アグスチン及びその軍隊の勇猛に讃嘆し、彼等が勝利を博す限り羨望は大きく、悲しみはつづいて来た。そこでこの戦勝の仲間入りをするため、首都占領の際に一緒にいた事が後太閤様に報告出来るやうにと、ドン・アグスチンに己の軍勢と一緒に進む許しを乞うた。然るにドン・アグスチンは危急時に応援しなかった事及び残るべきをさうしなかった故に、太閤様が彼の軍勢が常に先進するやうに命じているからそれは許されないと答えた。これをきいて虎之助は秘にドン・アグスチンの前衛を越え、首都に先に入市せんとしてその夜の中に出発した。然るにドン・アグスチンは彼及び彼の意向を案じていたので、彼が出発したときくと直ちに己も出発した。彼は地の理に明かな立派な案内者を持っていた故に虎之助より先に首都に着し、鉄門が閉じられていたので城壁を登って何等支障なく入市した<sup>72)</sup>。

このように漢城の制圧にあたって一番乗りを目指して互いに熾烈な競争を繰り広げていた。戦争での一番乗りは軍功につながり、秀吉が諸大名の戦争に対する貢献度を評価する一つの判断材料になる。

そこで加藤は自分が指揮する軍隊が小西軍に加わり、漢城の制圧と一緒に一番乗りを果すことを申し入れたが、小西に断られた。ライバル関係にあった兩人はこれを契機にして決定的に陰悪な関係に発展した。このような関係がいかに展開されるのか、次の史料を見よう。

悪魔は朝鮮にいるきりしたん及びぜんちよの間に聖教が弘布されて行くのをみて悲しみ、その阻止に努めドン・アグスチンの敵なる虎之助を通じて突然反旗を翻して人

71) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、658頁。

72) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、587頁。

々を驚愕させた。この虎之助は常にドン・アグスチンの戦勝及び隆盛を羨望し、太閤様の寵愛を破る機会を狙っていた。そしてドン・アグスチンは名誉ある公職にあり乍ら、太閤様の命令に背いて朝鮮にでうすの教を説くばあでれ達を迎へ、それを以て他の者が他の事をし、又彼の命令を軽んじるやうな機会を与へているといふ事を報告して己の希望を達する好機を狙った。ドン・アグスチンは虎之助のなさんとしている事を知って、彼及び他のきりしたん諸侯は細心の注意を払った。何故ならば虎之助が己の計画及び希望のためこの事を捏造して、ばあでれがいたといふ事を保証する時には太閤様が激怒する事は火を賭るよりも明かであり、その怒に依ってドン・アグスチンに更にきりしたん全体に多大の損害を及ぼすであらうから。然し勇敢にして立派なきりしたんたる彼はでうすが他の多くの機会に証明したまうたやうに、この場にもでうすの奉仕のためにかくしたのであるからよいやうに加護し給ふものと吾々の主を堅く信じているといつて人々を安堵させた。斯くして次に記するやうな結果が生じた。将士達は太閤様が調査官を送ってもばあでれのいないやうに、ばあでれ及びその従者はこの場合長崎に戻るのが至当だと考へた<sup>73)</sup>。

このように小西には「宣教師追放令」が発効されていたにもかかわらず、イエズス会の宣教師を匿ってなお戦場まで呼びつけたことに対する圧迫感があった。なぜなら、戦場で軍功を上げて、秀吉の命令に背いているからである。この圧迫感をさらに強めたのは、漢城の一番乗りをめぐる陰悪な関係に発展した加藤との関係であった。つまり、加藤からの密告を恐れたのである。そのため結局、セスペデスを朝鮮から引き上げさせることになる。両人の関係はセスペデスが戦場から離れる契機になった。

では、セスペデスが朝鮮の戦場にどれくらい滞在したのか、戦場にキリシタンは何人くらいいたのかについてはセスペデスの書簡から少しうかがえる。すなわち、「神様の御旨にしたがってコーライ王国に行ったが、日本人が朝鮮人と繰り広げられている戦争に行っている2000人のキリシタン兵士の聴解と助けるためであつて、そこで一年間留まった。」とあつて<sup>74)</sup>、セスペデス自身は一年滞在したと明記している<sup>75)</sup>。

ところが、セスペデスは日本に引き上げる際も、「セスペデスは随者とともに朝鮮より対馬に渡った。そこで対馬島主夫人のドーニャ・マリヤ及びその家中の人々に聴解して50名のものにばうちずもした。この島には太閤様の役人がいて朝鮮の諸事を処理していた故に、長くは滞在できなかった。」のように<sup>76)</sup>、50人に洗礼を授けた。積極的に宣教活動を行った結果と言えよう。さて、アンダーラインの部分で「宣教師追放令」による迫害を意識していることが目につく。したがって、セスペデスが対馬で長く滞在できなかったにも

73) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、658頁。

74) セスペデス書簡(1597年2月26日)、ローマイエズス会古文書保管所, Jap, Sin, 12 I, f. 182. (前掲朴『세스페데스(セスペデス)』50頁から引用した)。

75) 滞在期間について若干の差が確認できる。前掲金「壬辰倭乱 従軍神父 세스페데스의 来韓活動과 그 影響(壬辰倭乱における従軍神父セスペデスの来韓活動とその影響)」720～724頁で、氏はセスペデスが2回に渡って朝鮮に渡ったと認識しながら、最初は一年半そして2回目は二ヶ月で合わせて一年八ヶ月だとする。そして前掲山口第五論文では742～743頁で一年半とする。ところが、前掲朴『세스페데스(セスペデス)』47～49頁で氏はセスペデスの1597年の書簡に基づいて1年とする。書簡の内容から見て滞在期間は1年と考えられる。

76) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、659頁。

かわらず、50人に洗礼を授ける精力的活動ぶりを見せている。宣教のためにいかに努力したのかが分かる。つまり、宣教と司牧を合わせた布教活動を行ったのである。

以上、朝鮮戦場のキリシタン大名がイエズス会に申し出た聴解と説教の要望に対して、イエズス会側は司牧だけではなく、一步踏み込んで宣教活動の意図をもって受け入れた。それで実際、戦場で宣教と司牧の布教活動をこなした。ところが、戦場での布教は日本人を対象にしか行われず、朝鮮の民衆及び官僚には機会が得られなかった。これは従来ザビエルが構想してきた朝鮮を経由した明の布教が挫折したことを意味するが、平和交渉にきた明の人と直接布教をめぐる面談することになった。

最後にイエズス会は布教活動であればすべてを受け入れたのか。これについて時期を遡らせて考察しよう。天正14（1586）年5月4日日本イエズス会の準管区長であるガスパル・コエリョ（Gaspar Coelho）と豊臣秀吉が面談をした時、秀吉は次のように要求している。

（秀吉が）日本でうすの教を伝道しているばあでれ等の意図を甚く賞揚した。支那征伐を企図し、そのため千隻の船を造らせている。印度から来る大船二隻を求めたいと思ふ、それには望み通りの金子を支払ふ。若し支那帝国を征服し終へたら、全部のものが一つの教を信奉するやうに諸国に教会を建設し、支那にも日本に於けるやうに入信する事を命ずると云った<sup>77)</sup>。

ここで秀吉が布教とひき替えに大陸侵略に必要な大船2隻を要求したのに対してイエズス会は受け入れなかった。今まで考察してきたように、明の布教はイエズス会にとって東アジアの布教を考える上で重要であった。明の布教が重要であったにもかかわらず、布教優先主義、つまり布教さえできれば戦争でも協力する活動方針は採択しなかった。この観点から見ると、朝鮮の戦場に従軍したイエズス会のセスペデスもキリシタン大名に戦争協力をする意識はまったくなかった。もし、慰問使と感じたなら従軍に応じなかったであろう。

### おわりに

以上、東アジアに対するイエズス会の布教の観点から朝鮮への布教を考察してきた。ここでフランシス・ザビエル（Francis Xavier）が構想した東アジア布教においては明の布教の意味合いが大きく、朝鮮を経由して明に進出しようとしたことが確認できた。

その一環としてイエズス会が朝鮮の布教に進出を図ったものの、日本の国内情勢で実現することができなかった。また豊臣秀吉によって「宣教師追放令」が出されてイエズス会の布教方針を宣教中心から司牧中心へと変更することになった。この事態によって朝鮮布教は手詰まりになったように見えたが、文禄・慶長の役が起こって思いがけない状況でイエズス会のセスペデスが渡航することになった。つまり、キリシタン大名が戦場に司祭を呼び寄せたのである。

この従軍をめぐるのは、聴解と説教を立て前として司祭を慰問使の役割を果たすものと考えたキリシタン大名の狙いと、純粋な聴解と説教の司牧活動に取り組みつつ、これを契機にして積極的に宣教活動を行おうとしたイエズス会の思惑が交叉した。いわば、キリシタン大名と従軍司祭の思惑は同床異夢であった。すなわち、グレゴリオ・デ・セスペデス

77) 前掲新井訳『グスマン東方伝道史』下、392頁。

(Gregorio de Céspedes) の司牧活動はキリシタン大名の狙いであった戦争遂行・軍功のそれぞれの側面で支える慰問使の役割を果たした。一方、従軍をきっかけにして積極的な宣教活動をもくろんだイエズス会の意図も満たされた。

したがって、セスぺデスの従軍について、山口氏などのキリシタン大名の思惑から慰問使とする見解と、朴氏のイエズス会の宣教師の立場から従軍司祭ではないとする理解はそれぞれ一面当たっているものの、片面しか捉えていないことを本論を通じて明らかにすることができた。

最後に、本稿を通じてイエズス会の東アジア布教に対する評価に関わる問題について触れよう。セスぺデスは文禄・慶長の役に朝鮮渡航の機会をつかんだものの、実際朝鮮民衆への布教は実現できなかった。しかし、文禄・慶長の役の中で従軍するだけで終わってしまったという消極的な評価ではなく、日本に進出していたイエズス会の布教の一環として評価することができた。つまり、ザビエル以来の一貫した明の布教のための構想であって、朝鮮の布教はその構想を実現する重要な経由地の意味があったのである。

また、従来韓国で行われてきたキリスト教の朝鮮への進出に関する研究では<sup>78)</sup>、日本に進出していたイエズス会の朝鮮に対する布教は評価されてこなかった。ところが、イエズス会の様々な構想を洗い直すことで、東アジア全体を対象にした布教計画の一環として朝鮮布教の試みを明らかにした。そして、同じくイエズス会の中国の布教についても、マッテオ・リッチ (Matteo Ricci) が重要視されていた。しかし、実現は出来なかったものの、日本のイエズス会が朝鮮を橋頭堡として明への布教の構想を画したことが明確になった。このように日本に進出していたイエズス会の東アジアの布教計画から見直してみるのが今後の課題であろう。

---

78) 민경배 (閔ギョンベ) 『韓國의 基督敎會史 (増補版) (韓國の基督敎會史 (増補版))』 (大韓基督教書會、1977年、韓国)、이영헌 (李ヨンホン) 『韓國基督教史』 (Concordia Press、1978年、韓国) など。